

ふるさとの風 二〇十二年 睦月



栄枯盛衰は世の常一。

平安時代末期、龍が天に駈け昇る勢いの如く、栄華を掴んだ武士（もののふ）がいた。

飛龍在天

ふるさとの風

—あらたまの年—

～初春の香り

千年の都、京都。

華麗な射手が腕を競う三十三間堂の「通し矢」は、新春を告げる京都の風物詩である。南北に長さ120メートルの堂内にある柱の数が33ある事から、三十三間堂の通称で知られるが、正式には蓮華王院という。中央に鎮座する湛下作の千手観音の巨像「中尊」、左右には500体ずつもの小さな千手観音像、そして風神・雷神、二十八部衆が堂内を埋めつくし、荘厳な雰囲気漂わせる。平安末期、後白河法皇の勅願により平忠盛、清盛が建立した天台宗の寺院で、その規模は当時の平家の勢いを物語る。

清盛はこの3年後、貴族として最高の位、太政大臣にまで上り詰めた。朝廷や貴族の対立が混迷を深めた時代、貴族社会に大きな楔^{くさび}を打ち込んだ平清盛は、我が国最初の「武者^{むさし}ノ世（武士の時代）」の到来を位置づけ、700年の礎を築いたのである。

平清盛の一門は、平家の中でも伊勢国に本拠を置く伊勢平氏主流の流れを汲み、伊勢との関わりは深く、伊勢平氏は伊勢守となった平維衡^{これひら}から始まる。「尊卑分脈」によると維衡は坂東平氏の一流で、平将門を討った武将平貞盛の子息とある。伊勢平氏の中で頭角を現したのが、清盛の祖父平正盛、そして父平忠盛である。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。…」

（平家物語 巻第一 祇園精舎）

平氏一門の盛衰を描いた平家物語。清盛の父、平忠盛が、三十六歳で初めて内裏の清涼殿「殿上の間」へ昇ることを許された、天承二年（1132年）から語り起こしている。忠盛は伊勢国安濃津（現在の津市）の出身。安濃津は古代三津（他は薩摩の坊津、筑前の博多津）の一つで、伊勢平氏の軍港・良港であった。

「忠盛御前の召に舞はれければ、人々拍子をかへて、「伊勢平氏はすがめなりけり」とぞはやされける。…」

（平家物語 巻第一 殿上間討）

五節の宴の席、忠盛は伊勢産の瓶子（徳利）と平氏にこと寄せて、忠盛の斜視（すがめ）をからかわれ、はずかしめをうける。貴族たちは殿上人となった忠盛を妬み、失脚させようと数々の策略を練るが、彼がいかに機転を利かせて乗り越えたかが物語の中で語られていく。

外宮参道に「清盛楠」と呼ばれる樹齢800年以上の楠がある。平清盛は勅使として三度、神宮に参向しているが、その時この木の枝が冠に触り、怒った清盛が枝を伐り払わせたという逸話により名が付けられたという。

また「清盛堤」は、清盛がこの地域を水害から守るため、治承年間(1117～1181年)に築いたと伝えられる。堤を築くときに清盛の屯所に張られた幕張の松の位置を示す標柱が今も残っている。



外宮 清盛楠

「入道相国、一天四海を、たなごころのうちににぎり給ひしあひだ、世のそしりをもはばからず、

人の嘲をもかへりみず、不思議の事をのみし給へり。」 (平家物語 巻第一 祇王)

天下を掌中に握った清盛であるが、「驕る平家久しからず」の如く、自らの奢りによって平家を滅亡に導いていった。

「世の中に武者おこりて、西東北南、いくさならぬ所無し、うち続き人の死ぬる数聞く夥し、

まこととも覚えぬ程なり、こは何事の争ひぞや」(聞書集)

西行が戦乱の世を嘆き、神宮の神威のもと、最も平穏な伊勢の地に庵を構えたのは治承四年(1180年)、平清盛、福原遷都の頃である。そして清盛の死は、ひとつの時代に幕を下ろすことになる。



知盛山久昌寺

伊勢市山里深い矢持町菖蒲は、平家の里とよばれる。平清盛の四男知盛が、実は壇の浦で入水せず生き延び、平家の再興を願い、伊勢に隠れ住んだ「落人伝説」の地である。知盛山久昌寺は平知盛の菩提寺で、本堂裏の五輪の塔と数多く並ぶ古碑は、知盛と平家一門の墓だといわれている。

元暦二年(1185年)、京の都を大地震が襲う。

「カヤウニテ今ハ世ノ中ヲチ居ヌルニヤトヲモイシホドニ、元暦二年七月九日午時バカリナノメナラヌ大地震アリキ。

…事モナノメナラズ龍王動トゾ申シ。平相國龍ニナリテフリタルト世ニハ申キ。…」(愚管抄 巻第五)

その百日余り以前に壇の浦で滅亡した平家一門の棟梁、平清盛の怨霊が龍になって舞い降り、この惨禍を起こしたと人々が噂したと、慈円は書き残している。

三十三間堂の千体の観音像…、拝観後には無限の慈悲に包まれる。闇に溶け込む黄金をまとう観音像たちには、必ず会いたい人と似た顔があるという。

喧噪のなかで耳をそばだてれば、平安の今様をうたう声が聞こえてくるかもしれない…。



外宮参道 清盛楠